平成２７年度研究成果中間報告書《平成２７年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	1	都道府県・指定都市名	北海道	研究課題番号・校種名	2　中学校
				教科・領域名	家庭
研究課題	**学習指導要領の指導状況及びこれまでの全国学力・学習状況調査結果から，学習指導要領の趣旨等を実現するための教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究** ○内容「Ａ家族・家庭と子どもの成長」（３）において，幼児と触れ合うなどの活動を通して，幼児への関心を高め，関わり方を工夫できるようにするための指導と評価の研究開発				
学校名（生徒数）	北海道教育大学附属旭川中学校（３４３名）				
所在地（電話番号）	北海道旭川市春光４条２丁目１番１号（０１６６－５３－２７５１）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL					
研究のキーワード 生活を工夫し創造する能力の評価の工夫　ＩＣＴの活用　幼児との触れ合い体験 関わり方の工夫					
研究成果のポイント ○幼児との触れ合い体験において，ペアで幼児の観察を行うことで，幼児と関わることが苦手な生徒も幼児への理解を深め，関心を高めることができた。 ○幼児との触れ合い体験の事前と事後に，幼児との関わり方について考えさせる学習を行うことで，生徒が自分なりの課題を持って幼児と接することや，体験を通して学んだことを生かして関わり方の工夫を考えることができた。 ○幼児の関わり方について理由を明確にして工夫を考えさせることが，客観的な評価を行うに当たって有効であることがわかった。					

１　研究主題等

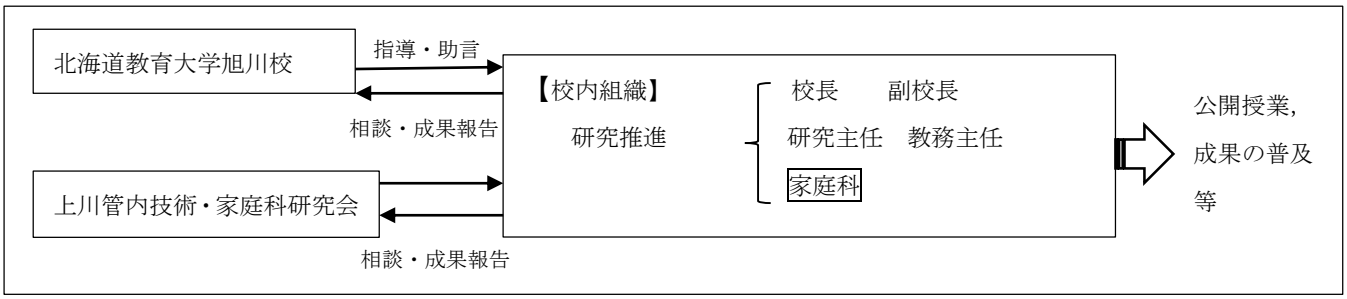
（１）研究主題

幼児への関心を高め，関わり方を工夫する能力と実践的な態度を育むための指導の工夫

（２）研究主題設定の理由

少子化・高齢化や家庭の機能が十分に果たされていないといった状況に対応し，幼児への理解を深め，子供が育つ環境としての家族と家庭の役割に気付く幼児触れ合い体験などの活動の充実が求められている。本校では，附属学校園としてつながりのある附属幼稚園と連携し，第２学年の生徒が幼稚園を訪問して関わる幼児触れ合い体験を行っている。日常的に幼児と関わる機会の多い生徒は，幼児に対しての関心も高く，関わり方を工夫しながら意欲的に取り組むことができているが，幼児と関わる機会の少ない生徒は，幼児と関わることに不安を抱えており，苦手意識を持っている。そこで，幼児の心身の発達に関する知識の定着を図る効果的な指導を工夫するとともに，幼稚園訪問を通して，生徒が幼児との関わり方の工夫を考えることのできる能力を育むための指導方法や評価方法を工夫する必要があると考え，本主題を設定した。

（３）研究体制



（４）１年間の主な取組

平成27年度	・生徒の実態把握と題材の指導計画の見直し ・教科調査官の指導訪問 ・上川管内技術・家庭科研究会との研究協議 ・指導方法及び評価方法の検証 ・公開授業等の実施（２回）

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）研究内容

（ア）「幼児と触れ合う活動」を通して，幼児への関心を高め，関わり方を工夫できるようにするための指導計画を工夫する。

・幼稚園訪問を効果的に実施するために，触れ合い体験の事前と事後の学習で，よりよい関わり方について考えることができる学習を指導計画に位置付ける。

（イ）ＩＣＴを活用することによって，幼児の心身の発達に関する基礎的・基本的な知識の定着を図る。

・普段幼児との関わりの少ない生徒でも，幼児の特徴を掴むことができるようにするため，写真や映像資料などＩＣＴを活用する。

（ウ）幼児の心身の発達について学習したことが，触れ合い体験での観察や幼児との関わり方の工夫にどのように生かされているかをワークシートの記録などをもとに検証する。

・幼稚園訪問での幼児と触れ合う活動において，ペアの生徒が幼児と関わっている様子や幼児の表情などについて観察記録をつける。

（エ）「生活を工夫し創造する能力」について評価する際の評価方法や判断の基準について検討する。

・幼児との関わり方を工夫する授業を公開し，「生活を工夫し創造する能力」を育むための評価方法や判断の基準について検討する。

（２）具体的な研究活動

（ア）「幼児と触れ合う活動」を通して，幼児への関心を高め，関わり方を工夫できるようにするための指導計画を工夫する。

・幼稚園訪問の事前と事後に幼児との関わり方の工夫を考える学習を行った。事前の学習では，幼児の心身の発達について机上での学びを通して，生徒が主体となり幼児と関わる工夫を考えることができた。事後の学習では，幼児と触れ合う活動を通して身に付けた知識を基に，幼児が主体となる関わり方の工夫を考えることにつながった。

（イ）ＩＣＴを活用することによって，幼児の心身の発達に関する基礎的・基本的な知識の定着が図られたか検証する。

・基礎的・基本的な知識を効果的に身に付けさせるためには，自分なりの考えを持ち，それが事実や事象と比較してどうだったのか，思考をめぐらせることが大切であると考えた。そこで，幼児の発達段階の特徴を捉える授業においては，１歳児，３歳児，５歳児の体格や運動機能，言葉や情緒などを予想させる活動を行った。その後，１歳児，３歳児，５歳児が登場するＶＴＲを用いて，一緒に遊んだり，食事をしたり，会話をしたりする様子を比較した。また，幼稚園訪問の事前学習では，訪問する幼稚園の幼児が遊んでいるＶＴＲや，幼稚園の先生が幼児と関わっている映像を視聴させた。３～５歳児の遊び方の特徴や関わり方のポイントなどについて学んだことは，その後の関わり方の工夫を考える場面において生かされていた。

（ウ）幼児の心身の発達について学習したことが，触れ合う活動での観察や幼児との関わり方の工夫にどのように生かされているのかをワークシートの記録などを基に検証する。

・幼児との触れ合い体験では，ペア若しくは三人のグループをつくり，幼児と遊びを通して関わっている生徒を観察し，その様子を記録させた。観察記録のワークシートの記述からは，生徒が幼児の目線に合わせてしゃがんで話しかけたり，幼児の話すペースに合わせてゆっくり話したりしている様子が記述されており，学んだ知識が関わりに生かされていたことがわかる。また，幼児の反応についての記録は対象の幼児についての理解をさらに深めるきっかけとなった。

・事後の学習において，幼児との関わり方を振り返ったところ，話し方や姿勢，安全への配慮など，学んだことを生かして関わっている様子がワークシートの記述から見られた。また，「笑顔で接したほうが幼児は『怖い』という印象を抱かない」，「長い文での会話は難しい」など，幼児の立場に立って考えることが，日常生活における関わり方を考える工夫へとつながった。

（エ）「生活を工夫し創造する能力」について評価する際の評価方法や判断の基準について検討する。

・幼児との触れ合う活動の事後に，次の２つの授業において，幼児との関わり方の工夫を考える授業を行い，上川管内技術・家庭科研究会とともに，「生活を工夫し創造する能力」の評価「十分満足できる」状況と判断する際の視点について検討を行った。授業については，以下のものを行った。

・一つ目は，「幼児と家で遊ぶとしたら，どのような遊びを考え，関わり方を工夫するかを考えさせる」授業

・二つ目は，「白画用紙１枚を用いておもちゃをつくり，そのおもちゃを使ってどのように幼児と関わるかを考えさせる」授業である。

どちらの授業においても，幼児との触れ合い体験での経験を生かし，互いにアドバイスし合うことで，よりよい関わり方の工夫を考えることができた。評価については，客観的な評価ができるよう，上川管内技術・家庭科研究会で評価規準について検討を行った。また，発達段階や個人差，幼児の成長など，様々な視点の中からどの視点で考えることができれば「十分満足できる」状況と判断されるのかなどを，検討する必要がある。

３　研究の成果と課題

（１） 成果

〇幼児の心身の発達の知識を基に，幼児の観察を行ったり，実際に幼児と触れ合い，遊んだりする活動を通して関わることで，どう関わってよいかわからず幼児を苦手としていた生徒も幼児への理解を深め，好意的な感情をもち，関心を高めることができた。
〇幼児との関わり方の工夫を考える授業を触れ合い体験の事前と事後に行った。事前の授業では，幼稚園の先生が幼児と関わる映像を見ることを通して，目線を合わせる，笑顔で話しかけるなどの関わり方の工夫を学び，自分なりの課題を持って幼児との関わり方の工夫を考えることができた。事後の学習においては，触れ合い体験を振り返り，実際に関わった幼児の発達段階に合わせた遊び方の工夫を考えさせた。その結果，体験を通して学んだことを生かし，「幼児の思いを大事にして遊びを決める」や「手を添えて，物の使い方を教える」など，発達段階に応じた工夫を考えることができた。
〇遊びを通した幼児との関わり方において，なぜその遊びを選択するのか理由を明確にしたり，どのようにして関わるのか，いくつかの視点から工夫を考えさせたりすることによって，生徒の思考の流れが明確になり，客観的な評価を行うに当たって有効であることがわかった。

（２） 課題

〇幼児との触れ合い体験で学んだことが，日常生活における幼児との関わり方の実践につながるよう，より一層体験の目的を明確に子供たちに持たせることや，体験内容の精査を行うなど，さらに授業の工夫改善を図る必要がある。
〇幼児への理解をより深め，生徒自身が発達段階や状況に応じた関わり方を考えることができるようになるためには，扱う映像資料の内容を検討したり，見せ方を工夫したりするなど，ＩＣＴの効果的な活用について工夫を図る必要がある。
〇幼児との関わり方について，幼稚園訪問の事前と事後でどのように思考が変容したのか，その効果を検証する必要があった。
〇「生活を工夫し創造する能力」の評価について，「十分満足できる」状況と判断する際の評価の基準について，十分検討することができなかった。

（３）研究２年目へ向けての取組

①扱う映像資料の内容の検討や，見せ方の工夫，ＩＣＴの効果的な活用について工夫改善を図る。
②幼児との関わり方の工夫について，生徒の思考がどのように変容したのか，その過程が明確になるようなワークシートの工夫改善を図る。
③幼児との触れ合い体験において，幼児の心身の発達に関する学びが生かされるよう，生徒が自ら課題を持ち，その解決に向けて主体的に追究する授業を充実させる。
④幼児との関わり方の工夫について「生活を工夫し創造する能力」の評価の判断の基準について，「十分満足できる」状況と判断する際の基準について，さらに追究する。
⑤全国技術・家庭科研究大会で，「生活を工夫し創造する能力」に関わる授業を公開し，研究成果の普及に努める。